

帝国農会幹事 岡田温(2)

—— 農事会本部・温泉郡農会技師時代 ——

川 東 蛸 弘

目 次

はじめに

第1章 農事会本部・全国農事会時代

第1節 明治32年

第2節 明治33年

第2章 温泉郡農会技師時代

第1節 明治34年

第2節 明治35年

第3節 明治36年

第4節 明治37年

第5節 明治38年

は じ め に

前稿で、帝国農会幹事・岡田温（おかだ ゆたか、1870年～1949年）の少・青年時代、東京帝国大学農科大学時代（明治29年7月～32年7月）について考察した¹⁾

本稿では、大学卒業後の温の活動について、考察していくこととする。明治32年（1899）7月、東京帝国大学農科大学乙科（実科）を卒業した温は、恩師の玉利喜造教授（農事会本部の常勤幹事を務めていた）の勧めで、32年8月1日農事会本部に職員として就職した²⁾。しかし、33年末、郷里から帰ってほ

1) 拙稿「帝国農会幹事 岡田温」（京都大学経済学部「経済論叢」第172巻第4号、平成15年10月）。

しいとの要請を受け、33年12月末全国農事会を退職し、温泉郡石井村に帰り、34年1月からは農業専門に戻ったが、同年4月に温泉郡長の要請を受け、温泉郡農会技師に就任し、38年5月まで4年にわたり、技師として郡内町村の農事改良・農民教育の指導に活躍した。

本論文では、温の東京での農事会本部・全国農事会時代（明治32年8月1日～33年12月末）、ならびに郷里の温泉郡農会技師時代（明治34年4月1日～38年5月15日）について、その活動状況を考察することとする。

まず、温が就職した農事会本部・全国農事会について簡単に述べておこう³⁾。農事会本部というのは、大日本農会（明治14年創立）から分裂して出来た民間の農業・農政運動団体である。中心人物は、熱烈火の玉の如きと言われる前田正名（1850年生まれ、鹿児島県出身、農商務官僚等歴任）である。前田は、明治23年農商務次官を辞任後、産業革命下の日本農業の衰退の状況（農産物輸入の増大、米価下落、農民没落、土地兼併など）に危機感を抱き、全国遊説し、輸入防止、輸出入の均衡、農事改良、富国、農商工団体の団結などを訴えた。そして、明治26年末から大日本農会の幹事長に就任し、更に運動を盛り上げた。

前田の率いる大日本農会は、明治27年（1894）12月、東京芝公園弥生館で第1回全国農事大会を開催した。この大会には全国から600余名の農村のリーダーが集まり、大変な盛況で、前田幹事長は「農事改良発達の要は学者の新案名説に拠るにあらず、只事の実行を以て勇猛奮進し、険坂を越え怒濤を渉るの、難苦に堪ゆるの決心（である）」⁴⁾との挨拶・演説を莊重且つ激烈な言辞で行っ

2) 岡田の大正2年の履歴書では、農事会本部への就職年月を明治32年7月全国農事会書記と記し、また、昭和13年の履歴書では32年5月1日、昭和21年の履歴書では32年4月と記しているが、いずれも記憶違いで、正確には明治32年8月1日である。

3) 西村栄十郎『全国農事会史』日進舎、明治44年。帝国農会史稿編纂会『帝国農会史稿記述編』農民教育協会、1972年、48～78頁。同『帝国農会史稿 資料編』551～771頁。岡田温「玉利先生と系統農会」中央農事報復刻刊行委員会『月報中央農事報』NO.2、1978年より。

4) 西村栄十郎『前掲書』35頁。

た。そして、3日間の審議をへて、大会は、一般農事上第1に着手すべきものは何なるや（農業団体の組織化）、府県是の作成、農家負債の償却、肥料の共同廉買、綿花・砂糖・大豆の輸入防止、毎年1回全国農事大会を開催、毎年1回府県で農事大会を開催、農事試験場の国庫補助、農業教育に関する建議など、25項目にわたる農政上の重要事項の決議を行った。

だが、その大会決議の実行段階で、大日本農会の幹部の中で、議論が百出し、幹事・参事の大半は農商務省に関係していたため、政府・議会に建議するが如き政治運動はすべきでないとの反対運動が起こった。そこで、前田正名は、28年1月19日に自分を支持する玉利喜造（帝国大学農科大学教授、大日本農会参事）や樋田櫓一らとともに、大日本農会を出て、明治28年1月に別の農業団体・全国農事諸会を設立し、決議の実行、農政運動に専念、従事していったのである（なお、前田は大日本農会幹事長を辞任した）。

全国農事諸会を結成した前田らは、その後、毎年全国農事大会を開催し、強力な農政運動を展開した。28年4月には第2回全国農事大会を京都市市会議事堂にて開催した。大会には全国から1,000余名が集まり、大盛況であった。そして、この大会で、用水灌漑上の利益を図ること、耕地区画の改良、病虫害対策、農業会議所法（後の農会）の制定、全国を8農区に分ち、毎年1回その府県の連合大会（実業大会）を開催することなど、22項目にわたる決議を行い、政府や貴族院・衆議院へ種々の建議を行った。翌29年1月には第3回大会を東京芝公園弥生館にて開催し、全国から328名が集まり、肥料購買の廉売、病虫害対策、綿花輸入対策など、25項目の決議を行った。そして、この大会で会の名称を全国農事諸会から全国農事会中央本部に変更し、前田正名が全国農事会中央本部幹事長に就任した。30年1月の第4回大会（東京芝公園弥生館）では、全国から200余名が集まり、農会法制定、各府県農事試験場の国庫補助、農作物病虫害試験場設立など、16項目を決議したが、大会中、皇太后大患のため休会となり、同年11月に第5回大会（同）を開き、再度農会法制定など15項目を決議した。31年12月の第6回大会（同）でも、農会

法の制定（条文）、農事会本部規則、府県農事試験場への国庫補助など、23項目の決議を行った。また、この大会で名称を全国農事会中央本部から農事会本部に変更した。

このような運動の結果、明治32年1月第13回帝国議会（第2次山縣内閣時代）に三橋四郎次議員（憲政本党、静岡県選出）らによって議員提出の「農会法案」が上程された。同法案は、第6回全国農事大会で決定された内容そのもので、農会を町村農会、郡農会、府県農会の3種とし、農業の改良発達を目的とし、町村農会の会員は地租2円以上納めるもの、または田畑4反以上所有するもので、強制加入とし、経費も会員から強制徴収する、農会は主務官庁の諮問に答申、また建議できる、というものであった。その審議の過程で、政府側が会員の強制加入と会費の強制徴収に反対したため、その条項が削除され、その代わり、政府から15万円の補助金を農会に下付することで妥協がなされ、6月農会法が制定された。全国農事会の当初の狙いは後退したが、念願の農会法が成立し（施行は、33年4月）、各府県で農会が続々設立された。

このように、農会の運動が進み、農会法が制定されたときに、岡田温が明治32年8月、農事会本部の職員に採用されたのである。その年の11月に第7回全国農事大会が東京赤坂溜池三会堂にて開催された。この大会に約300名が集まり、農事会本部規則、実業区大会開催、農会法施行細則の制定など、5項目（細目では37）の農政上の重要事項の決議がなされた。また、この大会で役員の変更が行われ、温の恩師の玉利喜造が農事会本部の新幹事長に就任した。また、顧問に樋田魯一、池田謙蔵、沢野淳、酒匂常明の4名、幹事には武藤幸逸（関東）、湯野川忠世（陸羽）、藪波浄慧（北陸）、多米八郎（東海）、井狩弥左衛門（京撰）、宮田亮造（中国）、関田可通（四国）、上床吉（九州）が選ばれた。

明治33年（1900）11月に第8回全国農事大会が東京赤坂溜池三会堂にて開催された。今回は、従来の大会と異なり、法定農会の代表者による大会で、全国から府県農会代表者94名が集まり、全国農事会規約など39項目にわたる決

議がなされた。そして、この大会で名称を農事会本部から全国農事会に変更し、また、組織の変更・役員の変更を行い、前田正名を会長に、玉利喜造を幹事長（再任）に選出した。また、参事に角田右作（関東区）、湯野川忠世（東北区）、藪波浄慧（北陸区）、野村栄喜知（東海区）、秋岡義一（京摂区）、原田起城（中国区）、重見番五郎（四国区）、上床吉（九州区）が選ばれた。

明治34年（1901）以降も全国農事会は毎年全国農事大会を開催した。なお、玉利喜造は35年11月の10回大会で幹事長を辞任し翌36年1月の盛岡高等農林学校長就任のため、以後は加納久宜子爵が幹事長に就任し、指揮をとっていった。そして、43年3月に中央農会の設置が認められ、同年11月の第18回全国農事会総会で帝国農会と改称し、初代会長に加納が就任した。

さて、以下、この農事会本部・全国農事会時代及び温泉郡農会技師時代の温の活動について述べることにしよう。

第1章 農事会本部・全国農事会時代

第1節 明治32年

温は明治32年（1899）7月13日東京帝国大学農科大学乙科を卒業したあと、寄宿舎を出て、7月29日芝区琴平町3番地日の出屋に下宿した。そして、8月1日から、農事会本部に勤務しはじめた。温29才の時である。

農事会本部は、芝増上寺の山門前大通りの天陽院という寺院に事務所があった。温が就職した時の農事会本部の職制は、幹事長、幹事、顧問、評議員、書記で、前田正名が幹事長、玉利喜造が常任幹事（31年12月～）を務めていた。なお、書記（事務職員）は上領浦治がいるだけであった⁵⁾。

温の就職1日目の8月1日の日記は「大会本部へ出勤。雑誌ノ整理等ヲナシテ帰ル」である。8月の仕事は、雑誌・図書の整理、各県農会からの報告の整理等であった。資料整理の中で、温は、農談会から農会成立への歴史的発達の

5) 前掲『帝国農会史稿 記述編』79頁、同『帝国農会史稿 史料編』55頁。岡田温「前掲論文」。玉利喜造先生伝記編纂事業会『玉利喜造先生伝』昭和49年、84頁。

経路を学んでいる。8月10日に温は簿記学校に入学した。働きながら学ぶという、温の熱心さを伺うことが出来る。また、この時期、温は早くも原稿を執筆している。例えば、8月10日に農業者の環境、13、15日には玉利先生の求めで、発火運動会設立の建議案、21日には肥料について書いている。

ところで、温の私事のことであるが、8月28日の日記に唐突に「離婚届ヲ調印シテ送りシ」との記事が出てくる。妻テルとの離婚とは全く驚きであるが、郷里に妻子を置き、東京で勉強していたことから夫婦間のすれ違いが起き、また、卒業後も郷里に帰らず、農事会本部に就職したことから不和が拡大したためと思われるが、離婚している。温の日記の特徴として、妻テルのことが一切書かれていないので、その間の事情は全く不明である（なお、実際の離婚届けが出されるのは、本年末の12月27日）。

8月28、29日、関西地方は大暴風雨に見舞われ、大きな被害を受けた。その記事がある。29日の日記に「昨夜半ヨリ雨トナル。天候穩ナラス。…鹿児島ノ暴風ハ実ニ近代ノ大風ナリ、全倒家一万五千余、半壊六千余、死者百余名、負傷者無数。濃尾ノ震災ヨリ大シ」と。この暴風雨は愛媛県の別子銅山でも大災害をもたらした。別子の各所で山崩れが発生し、住民を家屋もろとも銅山川の激流に押し流したのである。死者・行方不明は513人、負傷者26人に達した⁶⁾

9月1日、大沢某が農業雑誌「農日本」の発刊を計画し、温も執筆に参画することを承諾している。2日に温は初めての給与を農事会本部から受け取った。25円であった（ちなみに明治28年4月松山中学に英語教師として赴任した漱石の給与は80円であった）。

10月1日、温は玉利先生から商業会議所への忠告文の執筆を委嘱され、4日に草案を提出している。4日の日記に「実ニ近来ノ大議論、我ナガラ危ム程ナリ」と記しており、農会の立場から激しく商業会議所を批判したものと思わ

6) 島津豊幸『愛媛県の百年』山川出版社、1988年、108頁。

れる。5～8日は暴飲のため体調を崩し、休んでいる。そして、8日に温は下宿先をかえ、芝区琴平町4番地鈴木権二郎方に転宅した。

11月1日から第7回全国農事大会が大日本農会会堂にて開会された(～7日)。温は編集係の役をしている。1日の日記に「本日ヨリ大日本農会々堂ニテ第7回全国農事大会ヲ開ク。余、編輯掛リノ配役」とある。また、3日に紅葉館で懇親会がなされた。「紅葉館大懇親会。西幸吉氏ノ薩摩琵琶ヲ聴ク。弦々掩柳、嘈切極妙ニ達シ、満座肅然タリ。余ハ殊更深く感動シ、直ニ「聴琵琶」ヲ草シ、熊本ナル辱知ニ送リシ」とある。大会の内容は日記には書かれていないが、先に触れたように、この大会で、一、農事会本部規則、二、来る明治36年開催の内国勸業博覧会への出品の件、三、実業区大会開催の件、四、農商務省の技師の巡視等の建議、五、農会法の施行細則発布の督促の件が決議された。そして、役員の変更が行われ、新幹事長に玉利喜造が就任した。温が就職した年の11月に恩師の玉利喜造が名実共に農事会本部のトップとなったのである。

11月8日～10日は大日本蚕糸大会があり、その編集係、また、11日、12日は大日本畜産大会があり、編集係をしている。

12月に入り、1日の日記に次のような記事がある。「農商務省攻撃ノ件ニ付、玉利氏方ニテ秘密会議ヲ開ク。先生、十文字氏、針塚氏、僕。論文二題ト種々ノ材料蒐集ヲ託セラル」とある。なお、十文字(信介)とは神田の農事雑報社社主である。秘密会議とは穏やかでないが、農事会の反政府的雰囲気は何われる。その秘密会の具体的議題は不明だが、当時衆議院選挙法改正が問題となっており⁷⁾、農事会本部は農業界の立場から選挙法の改正に反対であり、その

7) 当時、ブルジョア側が選挙法改正の運動に取り組んでいた。山縣内閣下の明治32年11月20日、全国の51市が選挙法改正全国各市連合会を結成し、市を独立の選挙区とすることを要求(実質上、都市商工ブルジョアの代表を議会に送る)、12月12日には、大倉喜八郎を委員長として、衆議院議員選挙法改正全国商工会議所連合委員会を結成し、商工ブルジョア側として、選挙法の改正を要求した。そして、政府側は、商工業者の進出に好意的であった(升味準之輔『日本政党史論』第2巻、東京大学出版会、1966年、326～330頁)。

ことと思われる。12月10日の日記に「神田十文字氏ノ宅ニ至リ、農事雑報編輯ヲ助ク。同日ハ玉利博士及針塚氏ノ三人ニテ、近來時事農界ニ非ナルコトヲ短評、又ハ論文トシテ掲グ。余ハ選挙法改正ニ関スル意見ト政府ハ何処マデ農民ヲ愚視スルヤノ論文及短評十件斗ヲ草ス」とあることから推測される。

明治32年の年末、温は故郷に帰らず、東京で大晦日を送った。年末歳暮で大要次の如く述べている。歳暮の感は慷慨の文字に尽きるが、自分個人は卒業後少しもまごつかず、自分に最も適し、最も好む業務に携わり、日々の仕事に少しも不平が無いのは、自分以外に多くはいないだろう。かかる境遇にて、新年を迎えることが出来るのは、皆父母の賜物である。父母の長寿を祈るなどと記し、感謝している。

第2節 明治33年

明治33年(1900)の日記は、1月1日から9月15日まで書かれている。以下、それを参考に本年の温の活動や時代状況について見てみよう。

温は、正月を東京の下宿で迎えた。正月3日間は大学時代の友人宅を訪れ、歌留多会等に遊んだ。そして4日から農事会本部に出勤した。5日には昨年からの問題になっている衆議院選挙法改正反対の論文を執筆するために、玉利先生宅を訪れている。

1月19日に衆議院選挙法改正反対同盟会の会合が九州倶楽部であり、反対を決議し、気焰をあげた。しかし、30日には帝国議会の衆議院選挙法改正委員会、農業界側の反対を押し切って、選挙法改正が可決された。温は、この委員会を傍聴し、この日の日記に「選挙法改正案ハ五名ノ多数ヲ以テ委員ノ修正案ヲ可決ス。農民の権勢是ヨリ削減セシ乎」と憤慨している。

2月に入り、農事会本部側は貴族院に選挙法改正反対を働きかけた。3日に農事会本部で顧問、幹事会を開き、また、12日も本部で玉利幹事長らと会合した。そして、陳情文の原稿は温が執筆することとなった。12日の日記に「議員選挙法改正ニ関シ、午後六時ヨリ本部ニ於テ玉利幹事長、十文字氏、針塚氏

会合。四人ニテ芝口ノ某牛肉店ニテ晚餐ヲ食ス。其ノ夜、論文ヲ草ス」とあり、また、翌13日の日記に「各貴族院議員ヘノ陳情表を清書シ、帰宅シタルハ午前一時ナリキ」とある。

しかし、この衆議院選挙法改正案は、農事会本部の反対にもかかわらず、2月23日、両院協議会で可決された。この日の日記に温は「本議會ノ大問題ナリシ衆議院議員選挙改正案両院協議会可決。但シ殆ト貴族院ノ意見ニ従ヒタリ。当日ノ島田氏ノ演舌速記ヲ見バ如何ニ衆議院ノ無定見ナルカラ証スルニ足ル。農民ハ遂ニ誰ニ拠ルヘキヤ」と記し、憤慨している⁸⁾

2月12日、農商務省は農会令を勅令で公布した。これは前年6月の農会法にもとづくもので、農会の区域、組織、権限等を規定したものであった。翌13日に農会令の協議の為、玉利喜造、多米八郎、駒田小次郎が集まっている。

2月下旬、郷里から温に就職の話があった。26日、温泉郡長浅野長道⁹⁾が上京し、農事会本部にやって来て、温に温泉郡の巡回教師就任を依頼した。しかし、温は農事会本部の仕事を理由に断った。また、27日には郷里の宇野和太郎から「郡急ぐ、是非帰れ」との電報も来たが、直ちに謝絶している。この日の日記に「蓋シ、郡ノ巡回教師ナドノ為メ、本部ノ不都合ヲモ棄テ、帰ルノ不名誉ナル」などと記している。その後も何度か就任要請があったが、いずれも拒否した。

さて、温は農事会本部の仕事に専念した。この年農事会本部は月刊雑誌「中央農事報」の発刊を33年4月から行うことを決めた。その初代編集者に温が就任した。温はさっそく「中央農事報」の編集に従事し、15日に原稿を日進舎におくり、4月末に第1号を発刊した。なお、その間、温は4月の初めころから持病の歯痛（親不知）が悪化し、歯科医の手に負えず、18日に東京病院

8) この衆議院選挙法の改正は3月29日公布され、選挙権の納税資格は直接国税15円から10円に引き下げられ、1府県1選挙区の大選挙区制となり、そして、人口3万人以上の市は独立選挙区となった（升味『前掲書』326頁）。

9) 浅野は安政3年松山城下に生まれ、明治10年愛媛県師範学校を卒業し、県下の郡書記を経て、32年温泉郡長に就任していた（～34年6月）。

に入院し、29日に漸く退院している。以降も歯痛に悩まされることになる。

5月に入り、温は「中央農事報」第2号の編集を行った。5月下旬、温は再び歯痛を起し、25日に銀座の高山歯科に行き、病歯の親不知は容易に抜けず、その前の健全な第2臼歯を抜き、大変痛い思いをした。この日の日記に「生歯ヲ抜クハ随分痛キモノナリ。鉄ノもづ口ヲ以テ掛声ト共ニ振テ取ル医師ノ気丈ナルニモ感服シタリ」などと記している。なお、「中央農事報」第2号は29日に発刊した。

6月も「中央農事報」の編集に従事し、13日に第3号の原稿を日進舎に送り、23日に発刊した。その間の6月3日、郷里から友人の重信喜太郎¹⁰⁾がやって来た。縁談の話と思われる。それは、10日、農科大学時代の先輩の清水元吉（明治30年卒業、茨城県猿島郡古川町出身）が温の下宿に泊まり、この日の日記に「清水氏来泊。縁談ノ件ニ付キ越宵」との記事があるからである。

7月8日に、神田の開花楼で講農会大会と農科大学卒業生の送別会があり、出席した。講農会の大会では役員の改選が行われ、幹事長に小川文三郎（明治29年卒業、佐賀県小城郡北多久村出身）、会計幹事に久次米邦蔵（明治26年卒業、徳島県阿波国徳島町出身）、編集幹事に中込茂作（明治31年卒業、山梨県西山梨郡国里村出身）、評議員に阿部資満（明治29年卒業、東京麻生区霞町出身）、竹内進（明治24年卒業、石川県能美郡久常村出身）、¹¹⁾そして岡田温が選ばれている。

明治33年は義和団事件の年であり、また、政友会創立の年であった。温は政治に大いに関心がある。温のスタンスは政党不信で政友会の創立を歓迎せず、不快感を示している。9月15日の日記に「帝国ホテルニ於テ立憲政友会創立発会アリ。此時代議士ノ入党者已ニ百五二名ナリシト。政海ノ弊、之ヨリ

10) 明治10年10月10日温泉郡小野村に生まれる。重信次郎の次男。30年東京法学院を卒業し、後、37年弁護士試験に合格し、翌年開業（愛媛新報株式会社『愛媛県紳士録』昭和9年）。

11) 講農会役員の卒業年、出身は明治31年『講農会々員名簿』より。

愈盛ナランコトヲ恐ル」とある。

明治33年の日記は9月15日で終わっており、以降多忙のためか書かれていない。なお、33年の11月10日から13日にかけて、東京赤坂溜池三會堂で第8回全国農事会が開催されている。先にも述べたごとく、この大会で会の名称を農事会本部から全国農事会に変更し、また、前田正名は第一線を退き会長となり、幹事長には玉利喜造が再任され、文字通り、玉利が最高責任者となった。

年末、郷里の温泉郡農会に技師を置くことになったからぜひ帰ってきてくれ、という交渉があり、また、両親からも家計の経済的危機から帰国を催促されたので、温は、温泉郡農会への約束はしなかったが、後任に同級で大蔵省につとめている大島国三郎（京都府何鹿郡中筋村出身）を推薦して、全国農事会を退職し、帰郷した¹²⁾

第2章 温泉郡農会技師時代

第1節 明治34年

明治34年（1901）の日記は、1月1日から10月7日まで書かれている。それを参考に岡田家の農業や家族のこと、温の温泉郡農会技師の活動のこと、ならびにこの時代状況について見てみよう。なお、本年は恐慌の年でもある。

明治34年1月、温は再び温泉郡石井村大字南土居1050番地で農業専業に戻った。34年初めの頃の岡田家の土地所有面積は、居村の南土居と北土居に、田畑合計2町7反3畝17歩程有していた¹³⁾。なお、自作・小作の面積は不明である¹⁴⁾

岡田家は耕作地主である。毎年小作料を納入させている。本年の小作米は、1月6日に収納済となっている。そして、それらの小作米を順次販売していた。

12) 岡田温「私の略歴」より（昭和21年、温が77歳のときに書いた文章。岡田文庫所蔵）。温不在中の5年間、実家の経済は火の車で、負債1,600円余をかかえていた。

13) 明治34年の日記の末尾の記事によると、北土居に田8反8畝12歩、南土居に田1町8反1畝27歩。畑2畝8歩、草地1畝。なお、宅地は8畝9歩。

14) のちの記述から、自作地は数反ぐらいと推測される。

1月10日に米4俵を売却した。翌11日に「地租金納付。昨日米四俵売却。相生種（下等米）九円六十五銭相場」と記している。なお、価格は1石当たり単価である。その後、16日に米2俵（1石9円50銭）、また、3月25日に米3俵（9円65銭）との記述がある。岡田家の土地所有から見て、もっと多く販売していると思われるが、記述なく不明である。

また、岡田家は自作もしている。表作は米作で、裏作が麦（裸麦・小麦）や野菜である。1月の日記では、8日に麦修理の記事、11日には麦作地に燐酸肥料を施している記事がある。本年の1月は暖かく、麦は順調に生育していたようだ。22日の日記に「石鉄山ヲ除クノ外、四山雪ヲ見ズ。麦ノ葉ハ軟ラカク生育シテ、彼岸ノ前ノ如シ」とある。26日には、利三郎を雇い（日雇いと思われる）、麦に人尿を施すなどしている。

なお、岡田家は1月12日に理由は不明であるが、牛を売却している（価格は37円50銭）。したがって、以降、岡田家では、自作田の耕耘は賃耕となる。

明治34年（1901）は、前年に続き、全国的に経済恐慌・不景気の年である。したがって、日記にも不景気に関する記事が見られ、また、岡田家自身も土地を担保にして五十二銀行から借金をしている記事が見られる。1月29日の日記に「五十二銀行ヨリ負債ヲ起サンガ為登記所ニ出頭。同役所ニハ登記請求人充満シテ、役人ハ午後九時マデ勤務スト。然レバ場内立錐ノ地モナキ程ナリ。経済界ノ事情察セラル」とある。このとき岡田家は銀行から500円借りたが、このお金は岡田家の経費だけでなく、親戚や友人への貸付のためであった。2月2日の日記に「金受取ノ為、五二銀行ニ行き、現金五百円受取り、其夕へ百五拾円を岡田義朗ニ返金、百五拾円ハ同人へ本月末マデ無利貸与シ、猶百円ハ同人へ当座預ヲナシ、残り百円ヲ諸経費ニ充ツルコト、ナシヌ」とある。記事中、岡田義朗は温の伯父（母の兄で、分家、新宅という名でも出てくる）である。

2月に入ると、西北の寒風が吹き、烈寒となり、畑作物にも萎凋するものが現れ、人通り・行商も少なく、旧年末・正月の景気にも悪影響が見られた。2月2日の日記に「昨一日ヨリ急ニ烈寒ヲ催フシ来リ、一夜ニシテ蚕豆、小麦其

他冬作ノ萎凋シタリ」とあり、また、17日の日記に「年末市街ノ景気悪シキコト近年ニナキコトナリ。蓋シ、金融逼迫ト連日の雨雪強寒ニ由ルナラン」とある。明治34年の不景気ぶりが伺われよう。

また、2月の日記に、温の再婚の記事が出てくる。前章で述べたように、先妻のテルと明治32年に離婚していたが、本年2月伊予郡松前村大字北黒田の岡井弥太郎・ユキの二女イワ（明治8年8月22日生まれ、この時25歳、岡井亀三郎の妹）と再婚の話があり、2月9日に婚約をした。9日の日記に「岡井岩子ト結婚ノ礼ヲ挙ク」と簡単に記している。そして、12日には岡田隆太郎の媒介で結婚かための式を行っている（なお、結婚式は、4月9日、届け出は大分遅れて12月4日である）。

また、2月の日記に、温の弟の安長宏太郎（明治11年2月生まれ、27年6月に松山市新玉の安長キヨの養嗣子）が店を開業するにあたり、手助けしている記事が出てくる。温は、自宅の農業の傍ら、弟の養子先の面倒も見ていた。そして、温は2月25日から安長宏太郎の開店用務のために上京し、1ヶ月ほど滞京し、3月20日に帰郷し、安長開店を手伝っている。

さて、農業専業に戻った温であるが、就職の話が来る。まず、愛媛県農学校校長・野村豊市から教頭への就任要請の話があったが、断っている。さらに、2月14日に温泉郡長・浅野長道から郡農会の試験場勤務の話もあったが、こちらも断っている。その後、浅野から温泉郡農会技師就任の話があり、こちらの方は承諾した。その事情・心境を温は後の昭和21年に「私の略歴」（岡田文庫所蔵）のなかで、次のように述べている。

「当時、松山農学校が建築し、殆ど竣工し、開校はしていたが、一年生だけで職員も揃ふて居なかった。初代校長は駒場出身の野村豊市氏であったが、野村校長から、教頭で来て呉れといふ交渉があった。野村氏の言われるには、君が郷里で活動地盤をつくるには、一時農学校に奉職して、県下の有志の子弟を教育し、全県に多くの門下生を持つことが一番よいから来い、というのであった。学校を出て間もない私には最上の条件であり、第三者からは郡農会よりは、

遥によい地位と観られたのだらふ。友人なども頻りに勧めた。だが、私は教育者には不適當と思っていたから、関心をもたなかった。私は何かしら大衆指導がしてみたかった。だから直接農家を指導する郡農会が最も良い修養処のように感じ、温泉郡農会に就職した。自由を好む青年が全国農事会で、各府県の農会の活動状況を見聞し、官庁よりも試験場、農学校よりも民間団体に働く方が面白いように思い込んだこと、今ひとつ次のような修業により農家の指導に相当自信をもっていたので、農学校で少数な生徒を教育するよりは、村に入って全農家を教育するのが面白くもあり、農事改良發展上即効果が大きいと考えたことなどが、一意、農会に向はしめたように思う」。

このように、温は、官吏や農学校の教員ではなく、民間に入り、全農家への大衆指導の職を選んだ点に、面目躍如たるものがある。そして、4月1日、温泉郡農会から辞令が出て、温泉郡農会の初めての技師に就任し、2日より出勤を始めた¹⁵⁾。温30才の時である。

温が就職して直後の、4月6日から8日にかけて、松山市公会堂において第5回四国区実業大会が開かれた。実業大会というのは、全国農事会が地方実業家の奮起を促すために奨励していた大会である。この大会に四国4県から農会関係者450余名が集まった。中央から全国農事会幹事長の玉利喜造（東京帝国大学農科大学教授）と佐々木忠二郎（農科大学教授）が来会した¹⁶⁾。実業大会の業務が温の最初の仕事であった。ただ、この時、温の結婚式（4月9日）の直前であり、その準備と重なり、温は多忙を極めていた。5日には玉利、佐々木両先生を三津港に出迎え、翌6日から大会が始まり、大会の業務に多忙であった。夜も7日は明治楼で駒場、西ヶ原会（同窓会）の宴会、8日は道後で園遊会と忙しかった。8日の日記に温は「自分ハ明日ノ準備ニ心急ガレ、早ク帰り、

15) 愛媛県農会は明治29年12月、全国に先駆けて設立され、そして、33年4月県農会に初めて技師が配置され（札幌農学校出身の千石興太郎）、そして、各郡農会でも技師が置かれ、温泉郡農会では34年4月から置かれ、温が最初の技師となった。

16) 『愛媛県農会報』第25号。明治34年5月。

先生ヲ三津ニ送り得ズ」と悔やんでいる。

温は、4月9日、岡井岩子と再婚した。そして、10日、11日、12日と披露宴が続いた。

結婚後、温は、温泉郡農会技師として職務を精力的に行った。温泉郡農会は、当時各町村で2週間程度の短期農事講習会を開催していた。温はその講師となって活動した。また、温は郡内各町村の農事改良(短冊型苗代、害虫駆除等)等のため出張し、講話や巡視等も行った。以下、その活動状況を記しておこう。

4月は、11日から25日まで、温泉郡荏原村で短期農事講習会を行った(荏原、坂本両村から38名参加)。温は結婚式の披露宴が続いていたため、13日から講師を務め、土壌学、肥科学、養蚕学を講義した¹⁷⁾。また、4月27日からは川上村からの要請により、27日は川上村南昌寺、29日は川上村字三軒屋渡部方にて(100余名参加)、30日には川上村字北方医王寺で(30余名)、それぞれ講話・講習を行った。なお、川上村からよく呼ばれたのは、村農会長の松木喜一¹⁸⁾が農事改良に熱心なためであったと温は述べている。

5月は、1日から16日まで、地元の石井村居相で農事短期講習会を行った。しかし、石井での修得生は少なく、温は閉会日の16日の日記に「修得生二十一名頗ル不成績ノ方ナリシ」と嘆いている。

5月中旬は苗代の季節である。当時の愛媛県及び県農会は農民に対し、短冊型苗代の励行を強制的に行い¹⁹⁾温泉郡も同様であった。

温は5月18日から23日まで、短冊型苗代励行督促のために、温泉郡東部の諸村10カ村を巡視した。その成績状況について、温は川上、荏原、坂本村を第1として、拝志、道後、小野、雄郡村がこれに次ぎ、三内と南北吉井村が最

17) 『愛媛県農会報』第27号、明治34年7月。

18) 明治5年久米郡南方村生まれ。松山中学卒業。明治40年川上村長に就任。

19) 愛媛県は明治32年8月に愛媛県害虫予防法施行規則を改正し、害虫予防のために短冊型苗代の規定をいれたが、33年度の短冊型苗代が不成績であったため、34年1月に再改正して、短冊型苗代不履行者に対し、科料または拘留を適用し、強圧的な態度でのぞむことにした(愛媛県史編さん委員会『愛媛県史 社会経済1 農林水産』愛媛県、1986年、139頁)。

も悪いと述べている。

5月28日から6月14日まで、害虫駆除予防講話のため、温は温泉郡北部の諸村を訪れ、巡回・講話した。5月28日桑原村、31日朝美村、6月1日御幸村、2日潮見村、3日久枝村、4日和気村、5日堀江村、6日浅海村、7日難波村、8日立岩村、9日五明村、10日伊台村、11日河野村、12日粟井村、13日正岡村、14日北条町等々。いずれも数十名から二百数十名が参加した²⁰⁾

短冊型苗代を励行していない農家に対しては、愛媛県は強圧的態度で臨んだ。温泉郡農会も温もそうであった。6月26、27日の両日、温は北条町に短冊型苗代不正者への告発のため出張した。27日の日記に「苗代不正者告発ノ件ニ付、北条町へ出張」とある。

6月23日に温泉郡農会臨時総会が郡役所で開かれている。浅野長道温泉郡長の新居郡長への転任に伴う郡農会長人事で、浅野は郡農会長を辞任し、新しく温泉郡長に就任した大導寺一善が温泉郡農会長に就任している²¹⁾

6月下旬、田植えの季節となった。この年は春以来晴天が続いていたが、6月20日の夜から漸く雨が降り、26、27日によく雨が降り、田植期となった。27日の日記に「暮春以来晴天続キ、麦作ノ如キハ、用水不足ノタメ早熟ヲナシタル位ニテ、一般挿秧ノ水ヲ氣使ヒタル程ナリシモ、二十日ノ夜叢雨アリテ以来、天候一変シテ雨勝トナリ、二十六、七日ノ田植期トナリテハ一層雨多ク、且ツ冷氣ト風トヲ加フルヲ以テ、自分ハ田植ヲ後ラスコト、セリ」とある。

温の自宅の田植えは6月28日から始めた。正条植で田植を行った²²⁾ 29日の日記に「本日モ壺反許り植ヘタリ。本年ハ全テ定規植トナス考ヘナリ。距離各一尺」とある。そして、7月3日に終わっている。

20) 『愛媛県農会報』第27号、明治34年7月。

21) 『愛媛県農会報』第29号、明治34年9月。

22) 田植えの正条植は、この時期まだ普及していない。温泉郡では明治31年余土村の鶴本多次郎・房五郎父子により始められたのが嚆矢で、近隣村にボツボツ普及していた程度であった。明治37年でもまだ、7%に過ぎなかった。本格化するのは38年度以降のサーベル農政下である(愛媛県史編さん委員会『愛媛県史 社会経済1 農林水産』146頁)。

6月末から7月中旬にかけて、県下では大雨が降り続いた。そのため、石手川の堤防が決壊し、田が浸水するなど大きな被害がおきている。例えば、7月1日「昨夜内川筋南土居分堤防いぬい、立待、立石、三宝寺及古川ノ南破壊、其内北井門尤モ甚シク、五百余間ニ達、五六町歩ヲ荒シ、数十町及古川部落ノ一部分ニ浸水ス」、7月15日「最モ大水、古川全部浸水、松前停車場水中トナリ、市坪八十四、五日間十分ニ減水セズ。地蔵町付近甘藷畑水中トナル。他ノ地方ニテモ植付後一日トシテ夏日ノ晴天ナキヲ以テ株中ノ二、三葉軟ラカク伸張シテ非常ニ見苦シ。近年ノ大雨」等。

7月、温は、郡内の田植、移植後の状況を巡回・視察するために、各村に出張した。8日は荏原、拝志村、9日は湯山村、伊台村、道後村等。早くも浮塵子、二化螟虫の卵が所々発生していた。

また、大雨の中、7月10日から温泉郡短期農事講習会を余土村（余土、生石、垣生、雄郡村の4カ村参加）と味生村（味生村、古三津、新浜、朝美村4カ村参加）で行い²³⁾温は16日までは余土村に、17日からは味生村に講師として出張し、講話を行った。

大雨は、7月23日まで続いたが、24日以降は一転して、一ヶ月近く炎熱が続いた。そのため稲作の生育は大いに回復した。8月18日の日記に「去月二十三日夜驟雨アリテ以来、毎日一点ノ曇リモナク晴天炎熱打続キ、為ニ稲作ハ大ニ回復セラレタルモ、發育ノ状短縮セリ」とある。

8月は晴天続きのため、逆に旱魃の心配も出てきたが、8月21日、22日には降雨あり、旱魃にならずにホッと、温は平年作以上の見込みと観測している。8月23日の日記に「前兩日ノ雨ハ夏作物非常ノ有益ナリ。是ナカリセバ旱天ノ被害ヲ受クルモアリ。然ラサルモ一般ノ作柄不良ナルベシ。…其ヨリ八月中ハ晴天ノ上、時ニ降雨アリテ氣候宜シキ方ニテ作物ハ平作以上ノ見込」とある。

23) 『愛媛県農会報』第29号、明治34年9月。

7月末から8月初めにかけては、温は、温泉郡の島嶼部の各村を巡回した。7月30日には興居島、8月1日から5日にかけては睦野、両中島、神和村方面に出かけた。

8月下旬から9月にかけて、米価が騰貴している。端境期のためである。8月23日の日記に「米価益騰貴シ、二俵拾三円以上ニ達ス」とあり、また、9月6日には、「六日ニ至り米価十四円六十銭位トナリ、稀ニハ十五円ノモノモ出来タリ」とあり、かなり騰貴した。

9月に入り、温はよく各村に出張し、また、農事講習会を開いた。9月7日から、垣生、伊台、荏原、坂本、拝志、浮穴村に出かけた。また、11日から25日まで、新玉の多賀神社で素鷲、道後、湯山、桑原、久米、小野村6カ村の合同の短期農事講習会を開き、講師を務めた。

明治34年の温の日記は10月7日で終わっており、したがって、34年産の稲の刈り取り時期や収穫高等は不明である。

明治34年秋の全国の米生産高（水稲+陸稲）は4,688万2,024石で、前年4,143万2,177石に比し、13.2%の増大であった（反収は1.47石から1.65石へ）。また、愛媛でも同様で、34年産は70万3,522石で、前年の61万1,104石に比し、15.1%の増大で豊作であった（反収は1.34石から1.52石へ）。温泉郡も豊作で15万6,295石で、反収が1.55石であった²⁴⁾岡田家は篤農家であり、2石を大きく超えていたものと推測される。

ところで、34年末、温は、岡田家の1,600円余の負債を整理するためと思われるが、12月に土地を大量に売却している。北土居の土地（田）5反4畝16歩を永木喜太郎に（681円66銭）、同じく北土居の土地（田）3反3畝26歩を伯父の岡田義朗に（419円1銭6厘）売却した。また、居村の南土居の土地（田）3反8畝25歩を岡田隆太郎に（580円）、同じく同村の土地（田）2反2畝2歩を岡田義朗に（242円）売却した。合計4カ所1町4反9畝9歩の

24) 加用信文監修、農政調査委員会編『改定日本農業基礎統計』農林統計協会、1977年、194頁。各年次『愛媛県統計書』。

売却である(1,922円76銭6厘)。日記が途中で終わっているのも、負債整理、土地売却で多忙であったためと考えられる。その結果、34年末には、岡田家の土地所有は、南土居に、田1町1反7畝24歩、畑2畝8歩、草地1畝、合計1町2反4畝12歩に縮小した²⁵⁾

日記欠であるが、『愛媛県農会報』によると、温は10月17日から31日まで東中島村に出張し、東中島村第一尋常小学校にて、東中島、西中島、陸野、神和村4か村合同の短期農事講習会を行い、温が講師を務めている²⁶⁾

第2節 明治35年

明治35年(1902)の日記は、1月1日から12月13日までである。温は、温泉郡農会技師を務め、また耕作地主で、35年初めの土地所有は1町2反4畝12歩である。なお、本年は冷夏・冷害、大凶作の年で、その記事もみられる。

1月は岡田家の農作業の記事が見られる。岡田家は、下人や常雇(春吉、熊次、鶴次等)、日雇い(八郎、利三郎、オルイ等)を使い、自作の農作業を行っている。例えば、1月3、4日は麦の中耕、15日は米搗き、20日は下肥及び土肥運び、21日は土肥の散布、27日は薪割り、桑の根打ち、28日は桑畑の中耕、29日は畑への土肥散布、30日は糯米搗き、等々をしている。なお、熊次が常雇と推定されるのは、日記に出勤という記事が頻発しているからである。

日記から、岡田家は農作物として、米麦、桑作のほか、野菜、果樹等多様な作物を栽培していることがわかる。野菜ではきゅうり、常葉、小松菜、たまねぎ、瓜、ナス、トマト等、果樹ではぶどう、桃、梨、りんご等である。

1月の日記に、三好藤次郎なる人物(松山市で米屋、酒店経営)に米30俵貸し付ける約定の記事がある。1月7日「三好藤次郎君来訪。貸付米ニ付テ左ノ如ク約定ス。一、俵数參拾俵、一、拾五俵ハ拾二月二十日金取拾壹円、一、拾五俵ハ九円ノ敷価、上リ相場。但シ、価決定ノ月ヨリ利子ヲ付スル筈」。

25) 明治34年岡田温日記の末尾。

26) 『愛媛県農会報』第32号、明治34年12月。

さて、公務であるが、温は郡農会には1月4日から出勤している。8日から愛媛県農会主催の農事講習会が開催され、その開会式が愛媛県農学校²⁷⁾にあり、臨席した。また、講習会にも10日、14日、20日と参観し、23日の講習修得証授与式(66名が授与)にも参列している。1月27日にも、温は農学校を参観したが、そのとき、野村校長よりまた、教諭就任を勧められたが、断っている。

なお、家族関係では、2月2日に温・イワ夫妻に長女・禎子生まれた。後の作家禎子の誕生である。しかし、温の日記は淡白で、「昨夜零時拾分分娩、女子出生。軽産ノ方ナリシ、生児尤モ強壯」とあるだけである(誕生日は3月6日に届け)。

さて、3月に入り、温は郡農会技師としての仕事をよく行い、短期農事講習会の講師を務め、また、各村を巡回し、講話を繰り返した。1日から難波村での農事講習会に参加し、12日まで行った。3月15日以降郡内各村を巡回し、15日は浮穴、石井村、17日は朝美、味生、出石村、18日は北吉井、川上、三内村、19日は南吉井、拝志、小野村、20日は小野、久米、桑原、素鷲村、24日は雄郡、垣生、余土村、26日は古三津、新浜、和気、久枝村、27日は湯山、伊台、五明村、28日は堀江、潮見、御幸村、等々を訪問した。

4月も温は各村を巡回し、講話を行った。7日堀江村、8日潮見村、9日大山寺小学校、11日久枝村役場、13日味生村、14日生石村、15日垣生村、16日雄郡村、17日朝美村、18日御幸村、等々。

明治35年は気候不順で寒かった。4月、愛媛でも寒かった。日記にも、その旨記述されている。4月11日「冷氣ノタメ、彼岸前後蒔付作物枯ル、モノ多シ」、12日「去ル九日頃ヨリ寒気ヲも催フシ、昨日ニ至多少降雹、南山積雪ヲ見ル」とある。また、寒さのため、岡田家の蚕児が斃死している記事もある。

さて、5月は苗代の季節である。岡田家は、5月4日に苗代用の粃蒔きを

27) 明治33年4月1日設置、34年4月開校。温泉郡道後村持田。

行った。品種は神力であった。

5月24日から6月14日の日記は多忙だったのか、日記に記述がない。しかし、この時期、苗代の苗が育ち、また、麦が稔り、刈り取りがなされたと思われる。

6月22日、岡田家は、麦打ちを行った。岡田家は、下人や常雇、日雇いを使い、温も自ら従事した。6月22日の日記に「裸麦十俵弱、蚕豆二俵、小麦七斗程、鶴次、熊次、おくら、ちむま、お婆、薫一、自分ノ七人」とある。この10俵7斗(4.7石)が岡田家自作地からの麦収穫であろう。

そして、岡田家は麦収穫後すぐに田鋤を行った(6月22日)。なお、岡田家は、牛を手放しているので、永木栄次に依頼した。

そして、6月下旬が田植の季節である。岡田家は、7月1日に田植をした。1日の日記に「浦田、東田挿秧。両方とも神力」とある。浦田とか、東田というのは、自宅の田の俗称である。なお、田植は、前年と同様、正条植えであろう。また、2日には亀次作の小作地でも田植えがなされている。「亀次作苗代挿秧。小田西方相徳、苗代黒天」。

7月、温は郡内各村の田植後の生育状況視察のために出張した。15日小野村、16日南吉井村、北吉井村、17日雄郡、石井村、18日道後、桑原、久米村、19日古三津、素鷲村、21日北条町、25日荏原、拝志、26日伊台村、等々。

明治35年(1902)は東北大冷害の年である。愛媛でも7月中旬以降、稲が育つ時期、降雨・曇天が多かった。「日記」によると、7月16日(大雨)、17日(大雨)、18日(雨又は晴)、19日(雨又は晴)、20日(大雨)、21日(曇、後晴)、22日(曇)、23日(曇、小雨)、24日(曇)と続き、25日~31日は晴天となっている。

8月は、温は農事講習会を行い、講義した。19日から25日まで粟井村で農事講習会を、27日からは北吉井村で農事講習会を行った。

8月の天候は、上・中旬には雨または曇りが多く稲の生育に不安を感じたが、下旬以降は晴天が続き、また、9月上・中旬も快晴で、暑かった。そのた

め、愛媛では東北冷害と異なり、稲の生育に期待が持てたようである。9月7日の日記に「近来ノ晴快ノタメ、稲ハ漸次出来直リ、各地方共昨年位ノ予定。但シ、出来方少シ遅レ、中種出穂期ニシテ、神力、相生等ハ好穂ナリ。自作ノ分ハ苗不出来ナリシタメ、神力ノ如キハ所タイタミヲ生、非常ニ見苦シカリシモ、漸次出来直レリ。今日マデ注油五回。株間少シク荒キ感アリ。三十二、三株位ナレバ可」とある。

しかし、9月下旬からよく雨が降った。22日から29日まで毎日降雨であった。そのため、螟虫の被害が出ている。10月1日の日記に「自宅2回螟虫切。白穂多シ。神力、ユケナ、葉クセ発生。但シ、過日雨ヨリ生ズ」とある。

9月、温はよく各村に巡視のために出張した。4日荏原、坂本、浮穴、5日石井村、6日潮見、御幸村等。また、13日からは小野村、21日から牛渕、28日から拝志村、30日から見奈良で講習会が始まった。

10月もまた、温は郡内の各村の試作地を巡回した。8日石井村、9日粟井村、河野村、10日立岩村、正岡村、11日難波村、北条村、14日伊台村、道後村、15日生石村、味生村、16日余土村、17日素鷲村、18日桑原村、道後村、20日桑原村、道後村、素鷲村等。

11月13日、愛媛県農事大会が宇摩郡で行われ、出張し、17日に帰宅した。

さて、11月、稲刈りの季節となった。岡田家では温の農事大会出張中の11月16日、利太郎を雇い、稲刈りを始めた。「糯ノ外、稲刈。利太郎雇ヒ」。18、19日には熊次を使い、稲こぎを行った。「熊次出頭、稲扱開始」。そして、20日には新次を雇い、糯の刈り取りと稲こぎを行った。

そして、11月24日に永木（栄次）の牛を借りて、荒耕を行い、29日に麦の蒔き付けをしている。

12月6日糶摺りをした。「昼、糶摺り、19俵ト3斗。新反別一反歩二石二斗六升」とある。19俵と3斗（7.9石）は自作地の収穫高であると推定される。新反別一反歩二石二斗六升というのは反当たり収量であろう。

ところで、明治35年産米（水稻＋陸稲）であるが、東北が冷害に見舞われ

たため、全国の米生産は3,690万3,925石で、前年産の4,688万2,024石に比し、約1,000万石、21.3%の大減収・大凶作となった（反収は前年の1.65石から1.30石へ）。愛媛県の35年産米は65万677石で、前年産の70万3,522石に比し、6.6%の減収で、全国ほどの減少ではないが、やはり不作であった（反収は前年の1.52石が1.4石に）。温泉郡も同様で、同年産は14万7,670石で、前年産の15万6,295石に比し、5.5%の減少・不作となっていた（反収は前年の1.55石が1.4石に）²⁸⁾。その中で、岡田家の2石2斗6升という反収は、さすが篤農家だけのことはあると思われる。

明治35年の日記は、12月13日までしかないが、その後の温の公務を『愛媛県農会報』で補うと、12月20日に正岡村に、22日に浮穴村に、いずれも作毛品評会賞状授与式のため出張した。また、12月22日より29日まで第16回短期農事講習会に講師として出張した²⁹⁾。

第3節 明治36年

明治36年（1903）の日記は1月1日から12月末までである。なお、本年は麦凶作の年である。温32才の年である。

本年1月5日から愛媛県農会主催（県農会長重見番五郎）の第3回温泉郡短期講習会が、東部地区（南吉井村大字田窪香積寺にて）と西部地区（三津町桂町正覚寺にて）で開かれた。温は東部地区の講師となり、8日、13日～19日に講義（栽培及び土壌論）を行っている³⁰⁾。また、20日に閉会式があり、出席した。修了証授与者は39名であった。

その間、1月10日から三津浜町区発々園で第5回内国勸業博覧会出品農産物選抜会が開かれ³¹⁾、温も審査員となり、麦の審査を担当している。

28) 加用信文監修、農政調査委員会編『改定日本農業基礎統計』農林統計協会、1977年、194頁。各年次『愛媛県統計書』。

29) 『愛媛県農会報』第46号、明治36年2月。

30) 東部の他の講師は千石興太郎県農会技師（農業総論、植物栄養、肥料）と白石大蔵県農会技師（害虫）であった（『愛媛県農会報』第46号、明治36年2月）。

1月の岡田家の自作農業を見ると、20日に麦修理を行っている。そして、麦の生長は順調だったようで、20日の日記に「麦修理ヲナス。本年ノ冬ハ昨年ノ如ク乾燥ニ過ギズ、且ツ一時相当ノ寒気ナカリシタメ、土質柔ラゲルガ如シ。麦ノ発芽宜シク、当時氣候暖カナリシガタメ生長モ宜シ。蚕豆ノ如キハ生長ニ過グ」とある。そして、21日に麦修理ヲ終わっている。23日に熊次（常雇）と1ヶ月7日の出勤の約定を結んでいる。「熊次決算ヲナス。其結果トシテ、利子貸金ニ対シ、一ヶ月七日出勤ノ約定ヲナセリ」。

明治35年産米が全国的に大凶作であったため、36年は米価が騰貴し、その記事が見られる。1月21日「米価次第ニ騰貴シ、中米拾壹円五六十銭上ニ昇リ、上米拾二円五、六十銭ニ達ルアリ。…当歳暮ハ下方ノ経済恐慌ヲ来セルカ如シ」。

2月、温は温泉郡農会主催の短期農事講習会を各村で行った。1日から7日まで坂本村（修了者15名）、2日から8日まで荏原村（38名）、9日から15日まで浮穴村（50名）、10日から16日まで久米村（64名）、18日から24日まで石井村（73名）、25日から3月3日まで桑原村（30名）、2月26日から3月4日まで素鷲村（30名）、等々である³²⁾

3月、温は郡内町村の試作地監督、村是調査、土性調査等のため出張した。7、8日難波村、10日坂本、荏原村、16日久枝村、17日立岩、正岡村、18～21日難波村、等々。

3月25日、温は島根県に種牛購入のため出発し、大原郡大東町とその近辺の飼牛家を巡回し、31日に種牛を購入している。その後、松江、米子、岡山を経て、4月5日大阪に着し、大阪で開催されている第5回国産業博覧会（3月1日～7月31日）を見学した。10日まで見学し、11日には大阪の中之島で開催の全国農事大会に出席し、横井時敬博士の講演を聞き、12日午後2時大阪を出発し、翌13日11時に三津に帰った。

31) 『愛媛県農会報』第46号、明治36年2月。

32) 『愛媛県農会報』第49号、明治36年5月。

大阪から帰国した温は、4月中旬以降、自宅の果樹、野菜等の農作業に従事した。19日葡萄棚作り、里芋植え込み、白菜移植、南瓜植え替え、キャベツ移植、22日枳殻の植え替え、蚕豆生刈、23日越瓜、菜豆、馬鈴薯、ごぼう植え付け、24日生姜芋植え、26日南瓜植え等々。

4月下旬から5月上旬にかけて、温は麦の状況視察に温泉郡内の諸村(石井、浮穴、荏原、南吉井、拝志、川上、三内、久米、小野、北吉井、立岩、浅海、難波、正岡村等)を回った。しかし、麦には斑葉病とか、アカテ病が発生し、不作が予想された。5月8日「難波、正岡ニ一種ノ黒奴多ク発生ス。正岡村ニ甚シキ斑葉病アリ」等。

5月初め、苗代の季節となった。岡田家では5日に苗代用の粃蒔きを行った。稲の品種は、神力、相徳、黒天、糯であった。

そして、温は、5月中旬以降、苗代検査(短冊型苗代)と苗代の生育状況調査のため、郡内町村の視察に行った。7日立岩村、8日浅海、難波、正岡村、15、16日五明村、18日伊台村、19、20日湯山村、21日道後村、22日御幸村、23日潮見村、25日堀江村、26日和気村、27日久枝村、28日新浜村、29日古三津村、30日新浜村等。

6月も、温は各村を回った。1日伊台村、4日湯山村、5日道後村、8日伊台村、9日道後村、10日御幸、潮見村、12日新浜村、13日古三津村、15日久枝村、16日和気村、18日久米村、19日川上村、等々。

そして、温はこの調査の中で、短冊型苗代を励行していない農家を告発している(6月4日に湯山村の農家5人、27日には新浜村の農家1人、29日に川上村の農家2人)。

5月末から6月にかけて、麦の刈り取りの時期となった。岡田家は5月29日、新次、おるい(日雇いであろう)を雇い、裸麦の刈り取りを行った。大凶作であった。29日の日記に「麦刈取一日ニテ取込ヲ終ル。新次、おるいヲ雇フ。過日来ノ天気続キ麦俄カニ熟シ、予定ヨリ四、五日早ク刈取りヲ始ム。蓋シ、熟シタルに非ラズシテ枯凋シタルナリ」とある。また、6月2日の日記に

「雨前ニ刈リタル麦ハ多ク害病ノ甚シキモノ、意外ニ早ク熟シタルモノニシテ、雨後ノモノハ雨ノ害ヲ受ケ、結果本年ノ麦作ハ五分作内外ナルベシ」とある。6月6日に小麦を刈ったが、こちらも「半バ折レ、完実ナシ」という惨憺たる状況であった。13日に八郎を雇い、麦打ちしたが、近来なき不作であった。13日の日記に「八郎雇、麦打ヲナス。全部二反余歩ニ悪質ノ麦壺石、近来ノ不作ナリ」とある。反収は0.5石という近年の半分という大凶作となった。

なお、明治36年の全国の麦の生産高は1,353万6,712石で、前年産1,841万4,667石に比し、約488万石、26.5%の大減収・大凶作であった（反収は1.0石から0.8石に）。愛媛県はもっと酷く、明治36年の麦の生産高は26万1,603石で、前年産の48万8,512石に比し、約23万石、46.4%も激減し、惨憺たる結果となった（0.93石から0.51石に）。さらに酷かったのが、温泉郡で、36年産はわずか3万8,127石にすぎず、前年の10万2,034石に比し、63%も大減収した（反収は1.13石から0.41石に）³³⁾ 岡田家も半作であった。

6月下旬となり、田植の季節となった。温泉郡内で田植が始まった。19日「川上村出張字北方、川上、僅カニ挿秧ヲ始ム」。以後、田植状況視察のため、郡内町村に出張した。20日、21日北吉井村、22日、23日南吉井村、24日坂本、荏原、拝志村、25日、27日久米村等々。しかし、水不足と害虫発生で、田植の進捗状況はあまりよくなかった。例えば、20日の北吉井村「志津川五分通り、西ノ岡三分移植。但シ、川水枯レ、田植ヲ中止シ、苗代養水ニ池水ヲ抜き始ム」、21日の北吉井村「樋ノ口六分水入。三化虫同字ニ入ル」、22日の南吉井村「見奈良移植ヲ始ム。三化卵非常ニ多シ。駆除セズ。田窪四分水入。大駆除ヲナセトモ、尚、三化卵、二化蛾多シ。牛溺、下井手七八分水入移植。水大ニ少ナシ」、23日の南吉井村「南野田一部移植、要スルニ、以上ノ各村用水乏シク井手底乾燥セルモノ多シ。立待井堰上ケ、水大ニ少ナク、同夜水来ラズ、半年ノ苗代水ヨリ少ナシ。近来ノ減少。二化蛾大ニ発生、産卵迫レリ」等々。

33) 加用信文監修、農政調査委員会編『改定日本農業基礎統計』農林統計協会、1977年、199頁。各年次『愛媛県統計書』。

岡田家の田植は、6月29日に行った。昨年より2日早かった。この日の日記「田植。浦田，前田，東田，小田。昨年ヨリ二日早シ」とある。また、30日には亀次作の小作地でも田植がなされた。

7月、移植後の稲の生育状況を見るために、温は郡内の町村を巡視した。6日浮穴，南吉井村，7日北吉井，久米村，8日素鷺，桑原村，9日浮穴村，10日南吉井村，11日小野村，12日久米村，13日桑原，素鷺村，14日粟井，河野村，15日浅海，立岩村，16日余土，垣生村，21日興居島村，等々。7月初めの田植後，気温は低く，また，螟虫が大量発生していた。例えば，11日の小野村「孵化螟虫，南梅ノ本最モ多ク，北梅ノ本之二次キ，水泥之二次キ，平井谷最モ少ナシ」，13日の桑原村「(二化螟虫) 先日非常ニ多キモ，昨来五反歩一人ノ刻ヲ以テ人ヲ出シ，大駆除ヲナシ，卵ハ大ニ減シタルモ春植其他孵化蝕入多シ」等々。小学生を使い，螟虫採取をさせている記事がある。7月25日「小野村へ。小学生螟虫採取賞品授与式に列ス」。

田植の後，農作業は忙しい。岡田家では，7月24日に2番除草，31日に施肥，8月1，2日に3番除草，2日に水いれ，8日に第1回油入れ，11日に4番除草，20日に排水，25日に第2回油入れ，26日に土肥返し，31日に第3回油入れ等している。

8月もまた，温は各村に出張した。8月3日味生，生石村，4日潮見，堀江村，5日朝美，雄郡村，6日和気，久枝村，7，8日中島村，12日古三津，生石村等。13日から19日までは，短期農事講習会講師として，立岩村に出張し，講義を行った。21日坂本村で農事講習，さらに22日から25日まで川上村で農事講習を行った。講習内容は書かれていないが，坂本村では，害虫駆除で，他村も同様であろう。

9月も温は連日のごとく各村に巡回，出張した。8日坂本，荏原村，9日桑原村，10日浮穴，坂本村，11日荏原村，14日桑原村，15日荏原村，16日坂本村，17日荏原村，18日浮穴村，19日坂本村，21，22日荏原村，23日坂本村，24日桑原村，26日田窪村，28日荏原村，29日坂本村，30日荏原村等。

9月は寒く、三化螟虫が地中に入っている記事がある。9月28日の日記「荏原町東方、上野巡回、早稲ノ三化尽ク地ニ入り、中稲八分、晩稲七分地ニ入ル。過日来ノ寒氣ノタメナルベシ」。出張は螟虫駆除（白穂切取り）監督等のためであった³⁴⁾

10月も巡回・出張が続いた。2日荏原村、3日浮穴村、5日北吉井村、6日荏原村、9日桑原村、18日荏原村、20日素鷲村、21日石井村、23日味生村、24日坂本、荏原村、25日粟井村、26日北条、正岡村、27日立岩村、難波村、28日河野、粟井村、29日東中島村、30日西中島村等。害虫駆除や試作地巡視等であった。日記に二化螟虫が大発生していることが記されている。浮穴村では非常な損害を蒙り、北吉井村も荏原村も被害大であった。味生村でも螟虫被害多く、中稲は大抵倒伏していた。10月23日「(味生) 地方、螟虫多ク、中稲ハ大抵倒伏シ、総ジテ見込違ヘリ」。

11月、稲刈の季節となった。温は稲刈り、また株切視察のため、各町村を巡回した。2日坂本、荏原村、6日坂本、荏原村、7日荏原村、10日桑原村、12日久米村、13日森松、井門村等。

岡田家は11月10日から稲刈を始めた。11日に終わった。前年より1週間ほど早かった。そして、岡田家は12日に稲扱きを始め、14日に終わった。13日の日記「オリイ親子、鉋内夫婦、右四人斗扱。鉋松二人ニテ五石九斗扱、亀次作。オリイ二人五石一斗扱、浦田」、14日の日記に「糯粳三石、オリイ斗扱。浦田五石八斗。亀次作拾二石」とある。この収穫高合計は、31.8石である。小作地の亀次を除くと、自作地は13.9石となる。これは粳での収穫高である。そして、25日～29日に粳摺りをしている。残念ながら粳摺り後の収穫高の記載がないため不明だが、粳の収穫高から勘案すると、36年産米は大いに回復したと考えられる。

岡田家は稲収穫の後、11月16日に吉太郎を雇い、田鋤をし、22日、24日に麦まきをしている。

34) 『愛媛県農会報』第56号、明治36年12月。

なお、明治36年秋の米の収穫であるが、全国的には、4,643万4,469石で、前年の大凶作3,690万3,925石に比し、約954万石、25.8%の増大で、一昨年並みに回復した（反収は1.62石）。愛媛県は77万3,747石で、前年の凶作65万677石に比し、18.9%の増大で、やはり回復した（反収は1.63石）。温泉郡も螟虫被害があったが、18万1,781石で、前年の14万7,670石を23.1%も上回った（反収は1.69石）³⁵⁾

第4節 明治37年

明治37年（1904）の日記は、「公務日誌」と「日誌」の2つがある。前者は主として農会技師の仕事、後者は主として私事や公務以外のことが記されている。また、本年は日露戦争開戦の年であり、それに関する記事も多々見られる。

1月、温は温泉郡農会主催の短期農事講習を各村で次々に開催した。1月6日から北条村法善寺に農事講習を行った（～12日）。八木豊太郎技手が病気のため温1人が講義を担当した。12日に講習が終了し、大道寺温泉郡農会会長、井門理事出席の下、修了証書授与式を行い、54名が修了証書を授与された。13日からは、堀江村真福寺にて農事講習が始まり、温と八木が交代で講師となり、講義し、19日に終了、55名が修了証書を授与した。

この間、温は眼をわずらい、1月21日に左眼を、31日に右眼の手術を受けている。

2月は日露戦争開戦月である。日清戦後の日露の対立はついに戦争にまで発展した。2月4日、日本は御前会議でロシアとの交渉を打ち切り、軍事行動に移ることを決定し、6日に栗野公使が国交断絶をロシアに通告した。この日の「日誌」に「昨夜十一時海軍令部及十二師団、近衛等へ動員令下ル。日露事件切迫セルナリ。八木忠衛君明日出発ノ筈」とある。そして、8日、日本陸軍の先遣部隊が朝鮮の仁川に上陸を開始し、また、連合艦隊が旅順港外のロシア艦

35) 加用信文監修、農政調査委員会編『改定日本農業基礎統計』農林統計協会、1977年、194頁。各年次『愛媛県統計書』

隊の攻撃を開始した。9日の「日誌」に「日露戦端ヲ開ク」と記し、10日の「日誌」には「仁川、旅順共ニ初度ノ合戦、日本ノ勝利。但シ、千代田艦沈没スト。如何ニヤ」と、不安も記している。この日本軍による奇襲攻撃の後、2月10日に日本はロシアに宣戦布告し、日露戦争が本格的に始まった。11日の「日誌」には「二月十一日宣戦ノ勅語下ル。旅順攻撃、日本海軍大勝利」と記し、14日には松山市で提灯行列があった旨記している。市民も温も日露戦争の緒戦の勝利に心が躍ったことが伺われる。

2月も、温は農事講習を続けた。19日から雄郡村講習を土居田の善福寺で開始し、25日に終了し、80名が修了証書を授与された。20日からは御幸村で講習を開始し、26日に終了したが、修了者はわずか9名に過ぎなかった。温は御幸村講習について、「同村ハ商売家少カラズ、為ニ農事振ハサル村落ナルガ、出席者僅カニ十六名ニ過キズ」（2月20日）とか、「本日ハ二十名斗り出席タルモ、中途七、八名ハ帰ル。能ク々々不熱心ナル地方ナリ」（2月22日）、「修了者9名、従来郡内ニ於ル最小数ナリ。其他凡テ冷淡ノ村柄ナリ」（2月26日）などと嘆いている。また、27日から朝美村講習が、翌28日からは久枝村講習が始まり、朝美村は3月4日に、久枝村は5日に終了した。朝美村の修了生は25名、久枝村は37名であった。

なお、親族のことであるが、2月25日の「日誌」に、温の弟・宏太郎の家出の記事が出ている。宏太郎はこのとき27歳、松山市で店を経営していたが、経営不振で、かつ身持ちも悪く、ついに松山に居れなくなり、出郷した。その痛恨、憐憫の情の記事がある。「宏太郎種々ノ事情ニ束縛セラレ、今夜ノ内、呉へ出港ストノ相談シ来リ。不得已賛成ス。旅費トシテ僅カニ五円ヲ渡シタリ。彼ハ不幸ニシテ慢性ノ脳病アリ。総テ意ノ如クナラズ。近時身持宜シカラサルガタメ、種々手前ヲ考へ、今日ノ如ク再ヒ容易ニ郷里ニ帰ラサル決心ヲ以テ家ヲ出スルニ際スルモ、父母親近ニ別レヲ告クルコトモナラズ。況ンヤ門前ニスラ見送ルモノナシ。自分ハ之ヲ知り、且ツ其衷心ヲ諒セサルニハアラサルモ、彼レニ意見ノタメトシ、旅費ヲモ十分ニ与ヘズ。之レヲ世上温キ家庭ニ生育シ、

遊学其他、他郷ニ出ツルニ際シ、近親知己ノ見送りモアリ。骨肉慰藉ニ間ニ郷貫〔関〕ヲ去ルニスラ、其顧リミ決別ノ情禁シ難キモノニ比シ、其幸不幸天地モ畜ナラズ。彼レハ家族中若クハ近親中尤モ無頼者タリヌ。最モ身体ヲ勞セサルモノナルモ、今日ノ彼レノ境遇程可憐ナル、不憫ナルモノナシ。呼、不幸ナル我弟ヨ】。

3月も温は各村に出張、講習に従事した。3月6日は日曜日であったが、螟虫駆除始末のため、雨にもかかわらず、坂本村、荏原村に出張した。同村では日露戦争のため、駆除が充分なされていないことを嘆いている。「偶ノ日曜ナリシモ、予テノ約束アリタルヲ以テ、螟虫駆除ノ件ニ付、坂本、荏原ニ出張。…軍国多事ノ場合、何レノ村役場モ、虫ノ駆除等ニ心ヲ寄セズ。為ニ検査ヲ終ルコト能ハズ。事ノ軽重ヨリ見レバ、日露開戦ト螟虫駆除、固ヨリ比較ナラサル問題ナレドモ、カ、ル困難ニ際シテハ、特ニ其本職ニ勉強スルガ、即兵士之敵丸ノ間ニ戦フト同様、国ニ報スル所以ナルモ、未タ茲ニ至ラサル国民ノ智度ノ遺憾ナラスヤ」。7日からは味生村での短期農事講習に従事、翌8日からは生石村での短期農事講習に従事（生石・垣生村合併）し、味生村は13日に、生石村は14日に終了した。味生村は54名、生石・垣生村は45名が修了証書を授与された。

3月13日から愛媛県農会主催の第1回長期農事講習会が県立農学校講堂において開かれた（～4月11日）。県農会技師の千石興太郎、同技師衛藤一六（明治36年9月11日から県農会技師、帝国大学農科大学乙科卒業）等が講師となり、温泉郡から47名、伊予郡から18名、松山市から2名、越智、喜多、北宇和、西宇和、宇摩の各郡から1名、合計75名が受講した³⁶⁾温は14日の日に参観している。

3月15日から和気村での短期農事講習を行い、また、16日から潮見村で短期農事講習を行い、和気村は21日に、潮見村は22日に終了し、和気村は60名、潮見村は18名に修了証書を授与した。

36) 『愛媛県農会報』第60号、明治37年4月。

3月22日に、県立農学校³⁷⁾の第一回卒業式があった。卒業式に参列した温は、野村農学校長の訓示について「校長ノ訓示ハ軽重ヲ転倒セリ」などと酷評している。

3月25日から、喜多郡大洲町で、第4回愛媛県農事大会が開催された。温は大会に出席するため、23日に鶴本房五郎（県農会理事）とともに、陸路、大洲町に出張した。大会は大洲町公会堂にて開かれ、千石興太郎、三好保徳などが講演を行った³⁸⁾。26日に大会が終わるや、温は陸路、松山への帰路につき、26日の夜は内子に宿泊、27日に内子を出て、陸路、郡中まで行き、郡中から汽車に乗り、松山に帰った。陸路は徒歩あるいは人力車利用であろう。

3月29日から伊台村で短期農事講習が始まり、4月4日に終了し、26名に修了証書を授与した。なお、3月30日から道後村でも始まったが、8名しか出席せず、延期している。温は道後村について「実ニ村役場ハ勿論、総シテ不熱心ナル地方。但シ、其不熱心ナルハ所謂ワルズレニテ、同村ノタメ憂フヘキコトナリ」と酷評している。

4月も温は各村に出張、農事講習に従事した。6日、螟虫駆除検査のために荏原村を視察した。株切を完全にした場合には、螟虫は大半死亡しているが、そのまま鋤起をしている場合には生存率が多いことや、同村の西野部落は殆ど小作地で、しかも年々代わるので、株切を強いることは非常に困難である事などを記している。また、7日にも荏原村に出張、視察し、8日、9日は坂本村を視察した。13日から五明村で短期農事講習が始まり、16日まで温が講師を務め、17日に八木と交代している。18日には垣生村今出での講話会のために出張した。さらに、20日から湯山村での短期農事講習に出かけ、同村大字末と川中の2カ所で講義を行い、26日終了し、川中は40名、末は58名に修了証書を授与した。温は、湯山村講習について、日露開戦による召集のため講習生が少ないこと、また冷淡、不熱心で、講話を聴く能力がないなどと嘆いてい

37) 愛媛県立農学校は、明治34年4月開校。37年3月初めて卒業生を出した。

38) 『愛媛県農会報』第60号、明治37年4月。

る。28日には島嶼部の睦野村に出張し、翌29日に小学校にて講義し（40余名出席）、翌日帰松している。

4月にも日露戦争関係の記事が記されている。7日「戦争ノタメ各種菜物、干魚、牛肉共非常ニ騰貴セリ。絢非常ニ不振ニテ一反ノ織賃五錢位トナレリ。為ニ市中ノ細民大ニ困難セリ」、14日「十三日旅順第七回攻撃、マカロック中将戦死ス」、十九日「動員令下ル」等。

5月も温は農事講習会を行い、また、各村に出張・講話した。2日からは5日間にわたって温泉郡主催の講習会を開催し、温や森、宮長が講師となり、温は病理について講義している。この講習は6日に修了し、70、80名が出席し、好成績であったと述べている。

5月4日、全国農事会幹事長の加納久宜子爵一行（同幹事織田又太郎、農商務省農務局農政課長月田藤三郎ら同行）が、松山を訪れた。日露戦争下の戦時農事督励のためであった。加納幹事長ら出席の下、午後1時から松山公会堂で、時局に関する協議会及び農事大講話会が開催された。800名程が出席し、温も出席した。そこで、①稲麦種子の塩水選、②麦黒穂の防除、③虫害の駆除予防、④緑肥作の普及、⑤堆肥の改良及び普及、の5項目が遂行すべき必須事項として決議された³⁹⁾

5月9日は、島嶼部の東中島村に出張し、午後3時より9時まで、宮野小学校において、30余名に対し、副業としての促成栽培について講話した。翌10日小浜小学校において、50余名に対し、講話した。11日、12日は西中島に行き、村役場にて、23名に対し、副業として果物栽培、畜牛改良について講話した。そして、13日に帰宅した。

5月14日に愛媛県（菅井誠実知事）は告示第143号をもって、「戦時農業督励規程」を發布し、22日には各郡長を召集し、訓示し、督励した。そして、本部、郡部、町村部の職員を任命嘱託し、先の5項目の遂行を警察も使い、図

39) 『愛媛県農会報』第62号、明治37年6月。

ることとした。

また、5月25日には、愛媛県農会（重見番五郎会長）もこの督励に応える声明を出し、農事奨励に励むこととした⁴⁰⁾それに伴い、県農会の千石興太郎技師や衛藤一六技師等は各郡に出張し、農業督励を行った。例えば千石技師は、6月7日から21日まで、越智郡の11ヶ村を訪問し、また、6月23日から7月1日まで、新居郡、周桑郡を訪問し、講話を行っている⁴¹⁾

温泉郡農会も同様に戦時農業督励に励んだ。温も郡内の各町村を訪問し、講話・講演を行った。5月23日には島嶼部の神和村へ出張し、翌24日大字元怒和西清寺にて160名余りに講演した。さらに25日は大字津和地洞源寺で160余名に講演した。26日に二神村に出張し、安養寺にて100余名に講演し、翌27日帰省した。

なお、岡田家の親戚の安長家のことであるが、5月20日に温は安長の老母（弟、宏太郎の養子先）を引き取っている。しかし、老母は30日に危篤となり、31日死去した。31日の「日誌」に「午後六時過安長老母死去、宅へ引越以来十二日目ニシテ意外ニ脆カリシハ遺憾ナリ」とある。

5月、日露戦争は激化した。1日第1軍は鴨緑江を渡河し、九連城を占領。5日第2軍は遼東半島に上陸し、26日南山、30日大連を占領した。31日大本营は、旅順攻撃のため、第3軍の編成を決定等々。「日誌」に九連城陥落の喜びやロシア軍捕虜の記事がある。5月3日「九連城陥落ニ付松山市提灯行列ヲ催ス。壮快言ハン方ナシ」、27日「露国捕虜九十名来リ、折柄古町駅ニテ会セリ。悄然トシテ観衆ノ中ヲ送ラレタルハ憫然ノ至リナリ。大林寺ニ収容」。松山はロシア人の捕虜収容地として、つとに有名であった。

5月末から6月初めにかけて、麦刈りの季節となった。岡田家では5月31日に麦刈りを行い、6月1日麦抜き、8日に麦打ちをした。「麦たたき。収量十俵。新反別」。岡田家の麦作付けは昨年並みとすると2反余りだから、10俵

40) 『愛媛県農会報』第62号、明治37年6月。

41) 『愛媛県農会報』第65号、明治37年8月。

(4石)とは反収は2石で、大豊作であろう(なお、前年の36年が大凶作で反収が0.5石に過ぎなかった)。

6月以降も温は戦時農業督励等のため、精力的に各村に出張した。4日堀江村、6日和気村、7日久枝村と御幸村、8日朝美村、9日味生村、10日生石村、11日古三津村、13日新浜村、16日潮見村、17日、18日堀江村、19日余土村、20日興居島村、21日潮見村、22日和気村、23日久枝村、24日御幸村、25日朝美村、26日味生村、27日生石村、29日古三津、新浜村、等々。戦時督励事項中、とりわけ、害虫駆除予防が重要視された。「公務日誌」には螟虫駆除関係の記事が目立ち、小学生を動員しての駆除をしていることが判明する。例えば、6月7日「久枝及御幸村出張。両長戸青虫螟虫、蝗殊ニ多シ。螟虫ハ何レモ産卵セリ」、16日「潮見村出張…。尋常小学両校ニ就キ、螟虫駆除ヲ勧誘ス」、25日「朝美村出張。味酒ノ一部分ヲ除クノ外、駆除成績宜シ。十一ヶ村中ノ第一ナリ。螟虫駆除ノ如キモ小学校ト共ニ始メタリ。小学校ニテハ卵塊ヲ役場ニ送り、多少ニ応ジ賞品ヲ与フ」等々。

6月下旬、田植の季節となった。28日「一般ニ田植ヲ始ム」。岡田家では、6月30日と7月1日に田植を行った。6月30日「欠勤。田植ヲナス。前田四十二、其下及東田三十六、神宮寺前田四十二ノ定規ニテ植ユ。今仕舞モノニ、三アルモ多クハ明日ナリ」。7月1日「田植仕舞。亀次作浦田苗代」。

7月も温は各農村に出張した。何れも、町村への農事督励、町村督励部の監督、打ち合わせ等のためであった。1日南吉井村、2日素鷲村、3日浮穴村、4日御幸村、6日古三津村、7日北条町、10日生石村、18日堀江村、和気村、21日朝美村、味生村、生石村、22日興居島村、23日堀江村、25日和気村、26日久枝村、27日潮見村、28日御幸村、29日味生村、30日生石村、31日朝美村、等々。しかし、町村はあまり、熱心でなかった様子が伺われる。例えば、7月18日「督励部監督ノタメ堀江、和気、久枝村へ出張。何レモ未タ準備ナシ」。27日「潮見村出張。出席四名。村長居眠リヲナス。五名ノ増員ヲナス。其他標準ノ通り手当二人役」、30日「生石村出張。出席七名、北吉田、

久保田出デス」等々。

8月も引き続き、温は毎日のごとく各村に出張、巡回した。1日古三津村、2日新浜村、3日川上村、4日久米村、5日石井村、6日味生村、10日河野村、11日難波村、12日、13日西中島村、16日堀江村、和気村、17日潮見、久枝村、18日御幸村、19日味生、生石村、20日古三津、新浜村、21日余土村、石井村、雄郡村、22日桑原村、久米村、浮穴村、23日道後村、素鷲村、24日久枝村、26日坂本村、荏原村、27日小野村、北吉井村、拝志村、南吉井村、28日粟井村、河野村、29日難波村、立岩村、正岡村、北条町等々。各地に螟虫の被害が出ていた。3日「(川上地方)三化二回発生ス。二化被害多シ」、6日「(味生村)螟虫被害多シ」、10日「(河野村)別府上部一円二化多ク被害甚シキモ切取ヲ行ハズ」、20日「古三津、新浜出張。古三津ハ新浜ヨリ螟虫被害多シ。何レモ駆除不十分ナリ」等々。

また、岡田家の田にも螟虫被害が見られた。8月1日「前田二枚、亀次作南部螟虫被害、切取ヲナス」。2日「亀次作北部、小田、神宮寺前螟虫被害、切取ヲナス」、4日「浦田螟虫枯莖ヲ取ル」等。

そのため、県は、8月20日に訓令41号を市町村に発し、8月25日から9月13日まで、害虫駆除予防を命じている。

さらに、8月は晴天が続き、水不足のための被害も出ていた。17日「(潮見・久枝村)志津川及安城寺一部用水欠乏ス」、19日「味生・生石ヲ見ル。北吉田用水不足ノタメ、稲少ナク、西石井、居相、井門ノ一部、稍被害ノ度ニ乾ケリ」、30日「四十九日目ニシテ有効ナル降雨アリタリ。昨年モ四十八日(七月二十六日ヨリ九月十一日マデ)晴天ナリシモ、其間、夕立三回アリシガタメ、用水ノ不足ヲ告ゲサリシガ、本年ハ一部分一回ノ夕立アリシノミナルヲ以テ、一般ニ用水不足ヲ来シ、地方ニヨリ多少旱害ニ罹レリ。尤モ郡内一部分ニハ、全ク焼死シタルモノアリ」等。

なお、8月9、10日に愛媛県農会臨時総会が県会議事堂で開かれ、会長人事の改選がなされ、重見番五郎(地主、温泉郡立岩村長、県議等歴任)が退任

し、副会長の越智茂登太（地主，周桑郡中川村長，元県議）が会長に選ばれている。⁴²⁾

田植後の7，8月の岡田家の稲作の農作業の記述もあるので，少し触れておこう。7月17日1番除草，24日自作地螟虫被害，26日2番除草，31日螟虫被害の稲の茎切り。8月1日3番除草。前田，東田，浦田，小田に肥料を施す。4，6，9日螟虫被害稲茎とり，10日4番除草，14日螟虫被害とり，18日5番除草，22日螟虫被害茎切り，等々。

8月，日露戦争の戦闘は激化していた。8月10日には黄海海戦があり（露艦隊，旅順を出撃し，日本の連合艦隊と衝突），19日には乃木希典を司令官とする第3軍の旅順要塞への第1回総攻撃開始された（～24日，失敗に終わり，日本軍1万5,860人死傷）。松山第二十二連隊もこの旅順総攻撃に加わった。「日誌」に兵士動員や戦死の記事が記されている。8月2日「後備兵四万出兵」，3日「岡田卯太郎出征，本日千二百名出発」，20日「伊賀金次郎君戦死ノ報アリ。好男子惜ムベシ」等。

9月も温は督励部事業奨励等のため，毎日のごとく各地へ出張した。1日生石村，味生村，2日味生村，生石村，朝美村，3日古三津村，新浜村，5日和気村，久枝村，潮見村，御幸村，6日堀江村，7日興居島村，9日御幸村，10日古三津村，生石村，12日朝美村，久枝村，13日潮見村，14日堀江村，15日和気村，新浜村，16日久枝村，17日潮見村，19日味生村，20日生石村，21日和気村，22日御幸村，23日古三津村，25日朝美村，26日潮見村，27日堀江村，28日御幸村，29日久枝村，30日生石村，等々。

9月中旬が出穂期であった。岡田自作田では，12～14日頃に出穂した。12日「神力出穂中ナリ」，13日「神力出穂中。静穏。自宅ノ神力ハ穂揃充分ナリ」，14日「開花。天候無上ノ良好ナリ」とある。しかし，各町村で螟虫被害も見られ，指導している。9月21日「和気村へ出張。馬木ハ例ノ如ク注意行

42) 『愛媛県農会報』第65号，明治37年8月。

届キ、白穂切取ヲナセリ。和氣ハ不良ノモノ多ク、尤多キハ太山寺片岡ナリ。馬木ヲ除クノ外ハ相当白穂多キヲ以テ、二十三日ヨリ三日間ヲ期シ、命令ヲ発スルコトトセリ」、22日「御幸村へ出張。螟虫発生非常ニ多ク、我地方ニ優ル。一回モ駆除セサルモノ少ナカラサリシヲ以テ、各田ヲ巡検シ、各指名ヲナス。明日ヨリ二十五日マデヲ期シ、命令ヲ発スヘク命セリ」、25日「朝美村出張。…昨今螟虫ノ繁殖蔓延盛ナリ。早中稲ハ少ナク百分ノ五内外ナリ。白穂ハ平均一反歩六百、千二百位迄ナリ」、27日「堀江村出張。大字両入口螟虫非常ニ多ク、約三割ハ蝕害セラレタリ。権現、福角ノ中稲ハ何レモ一割以上ノ被害ナルベシ。同村ハ昨年ヨリ非常ニ多ク発生セリト云フ。権現、福角、大栗ノ大部分ハ螟虫ノタメ豊年ニアラズ」等々。

9月も日露戦争の戦闘は激化していた。8月末から9月初めの遼陽の戦いは日露両軍が総力を結集した戦闘となり、9月4日には日本軍は遼陽を占領したが、日本軍は2万3,533人も死傷する犠牲をだしていた。「日誌」に兵士動員や戦死の記事が記されている。9月1日「松山二十二連隊補充隊出征、出発」、2日「遼陽占領ノ報アリ」、8日「義兄来訪。長谷川嘉平氏戦死ノ報ニ接シ、ケイヲ琴平へ遣ス」等々。

10月も、温は害虫駆除指導、試作地巡視、麦塩水選等のため各農村に出張した。1日生石村、3日和氣村、4日潮見村、5日古三津村、新浜村、10日潮見村、11日御幸村、14日古三津村、新浜村、久枝村、18日味生村、生石村、朝美村、21日川上村、北吉井村、拝志村、浮穴村、22日道後村、伊台村、五明村、25日河野村、26日素鷲村、久米村、小野村、27日坂本村、石井村、余土村、28日生石村、味生村、29日御幸村、潮見村、久枝村、31日潮見村、和氣村、等々。また、各町村で白穂(生石村)、螟虫発生(潮見村)、イモチ病(和氣村、五明村)等も見られた。

11月も出張が続く。1日和氣村、3日浮穴村、4日、5日東中島村、11日垣生村、生石村、12日御幸村、潮見村、堀江村、和氣村、久枝村、等々。

11月は稲収穫の季節である。各地で刈り取りが見られた。岡田家では、11

月10日に刈り取りを行った。「稲刈取り。本日初メテ糯ノ外、全部終リ」。そして、12、13日に稲扱きをした。12日「稲扱。本日ノ斗扱左ノ如シ。百太郎二人ニテ三石三斗三升、おるい二人ニテ四石四斗、あきよ一人三石。糯刈取り」、13日「稲扱手伝ヲナス。少シ残り、殆ト扱キ終ル」。この粳の収穫高合計は、10.73石となる（糯が入っていないと思われる）。前年が糯を除くと10.9石ゆえ、前年並みの豊作であった。なお、粳摺りの記事がなく、収穫高は不明だが、前年並の豊作であっただろう。

11月19日から、い草栽培、薄荷栽培、麦稈真田調査のために岡山県及び香川県に出張し、30日に帰宅している。

なお、明治37年秋の米の収穫であるが、全国的には、5,138万1,822石で、前年の豊作4,643万4,469石に比し、さらに10.7%の増大で大豊作であった（反収は1.79石）。愛媛県は91万1,489石で、前年の豊作77万3,747石に比し、17.8%の増大で、全国以上に大豊作であった（反収は1.96石）。温泉郡も螟虫被害があったが、20万4,000石で、前年の18万1,781石を12.2%も上回った（反収は2.00石）⁴³⁾ 2年連続の豊作であった。

12月は郡農会に出勤し、38年度予算案の作成等業務を行っている。また、出張もしている。12日浮穴村、15日、16日浮穴村、23日浮穴村、26日伊台村等々。そして、28日に農会の会務を終了している。

第5節 明治38年

明治38年（1905）も温は「公務日誌」と「日誌」を記している。また、本年は温が温泉郡農会技師から愛媛県農会技師に転任する年である。また、本年は日露戦争2年目であり、気候的には冷夏・冷害の災害年である。

まず、日露戦争関係から見てみよう。1月1日、旅順のロシア軍が降伏し、2日開城規約の調印がなされ、13日に日本軍が旅順に入城した。25日には、黒

43) 加用信文監修、農政調査委員会編『改定日本農業基礎統計』農林統計協会、1977年、194頁。各年次『愛媛県統計書』

溝台付近で日露の戦鬪がなされ、日本軍はロシア軍を撃退している。その間、ロシア国内では、22日にいわゆる「血の日曜日」事件発生し、ロシア帝国と民衆の矛盾が激化した。

温は日露戦争に大いに血が沸き、戦争に関する記事を「日誌」に記している。元日には松山の堀ノ内の練兵場に行く。「本年ハ時局ニ就キ、回礼及新年宴会ニ代フルニ、元旦十時堀ノ内練兵場ニ集リ、松井旅団長ノ発声ニテ兩陛下万歳ヲ三唱シ、一同之ニ和シ開散。郡役所ニ於テ一同小宴ヲ開キ、正午開散」。2日に旅順降伏の号外が出て、3日に「旅順降伏ノ公報アリ。万歳」と歓迎している。7日には、石井村で旅順陥落を祝した行列があり、「旅順降伏祝賀会トシテ国旗行列ヲ本村ニ行フ」と記している。他方、石井村での戦死者もでて、22、23日には石井村出征兵士の葬儀があり、参列した。22日「兵士戦士者済川、片岡、菅原三氏合葬ヲナス。盛会ナリシ」、23日「末光兼五郎君葬儀ニ参列。俗人ニテハ望テ得ザル盛葬ナリ。国民モ稍国家ニ対する義務ノ重キヲ知ルニ至レリ」と記している。また、25日には、ロシアの「血の日曜日事件」の情報に接し、「露都大擾乱起ル」などと記している。

さて、1月の温の活動を見てみよう。温は1月4日から出勤。5日は欠勤し、自作地の麦修理、また、施肥をしている。なお、この夜、友人の重信喜太郎方の祝宴（明治37年弁護士合格の祝宴と思われる）に列し、重信方に宿泊している。また、4、5日石井村における村会議員選挙の半数改選（7人）があった。土居部落から大西安吉が出て、部落内で紛擾がおきたようだ。温は6日の「日誌」に「政党ノ弊悪ムベシ」と記し、政党への嫌悪感を表明している。

9日以降、農事調査等の業務をしている（明治36年から愛媛県農会が実施した農事調査のことと思われる）。しかし、11日の「公務日誌」に、「甲部調査ノ清算ヲ為ス。地方任ニ当ル者ニ調査的頭脳ナキ為メ無益ノ手数ヲ要スルコト多シ」と嘆いている。

1月15日（日）、温は県農会技師の衛藤一六に会い、その際、衛藤から県農会入会の要請を受けた。温の心が動いたようだが、温泉郡長の承諾が必要であ

り、このときは見合わせている。ただ、無念であったのだろうか、1月24日の日誌に「呼、青雲ノ好機ヲ逸セリ」と嘆いている。

1月16日、温泉郡農会技手の八木豊太郎が、浮穴村での麦種子事件のトラブルで、責任を取って辞任した。そして、25日に八木の後任に、山下直康（南宇和郡内海村）を技手に入会させている⁴⁴⁾

2月、温は農事講習会で講義を行った。7日から温泉郡農会主催の農事短期講習会が古三津村で始まり、温と山下技手が講義した。15日に講習が修了し、19人が証書を授与した。また、16日からは愛媛県農会主催の温泉郡農事短期講習会が河野村で始まった（～3月3日）。千石県農会技師のほか、温も嘱託講師となり、河野村に出張し、17日から23日まで米麦作、麦稈真田、畜産などについて講義した⁴⁵⁾ 河野村、浅海村、粟井村、難波村等、50余名が受講した⁴⁶⁾ 3月3日に修了授与式が行われ、53名に証書を授与した。3月3日の「公務日誌」に「県農会講習修了証授与式ノタメ臨席。越智県農会長、大道寺郡長、千石氏、自分、北条地方八ヶ村長臨場。盛ナル式ヲ行フ。授与者五十三名。生徒ノ催ニカ、ル懇親会ニ望ミ、夕刻帰宅」とある。

2月24日から川上村応観寺における農事講習会に山下技手とともに出張し、講義を行った。来会者50余名で、前回に比し、頗る盛況であった。3月2日に修了し、証書授与式を行い、61名に授与した。

3月、温は各村に出張し、巡回講話を行った。3月5日から8日まで小野村に出張し、北梅本、南梅本、水泥、平井の各大字で講話した。9日から12日までは道後村に出張し、祝谷、石手、持田、道後の各大字で講話した。道後村各大字は何れも20名ほどで集まり悪く、不熱心であった。13日から16日までは北吉井村に出張し、西岡、樋ノ口、志津川、山ノ内の各大字で講話した。18日から20日までは立岩村に出張し、滝本、萩原、儀式で講話し、21日に愛

44) 『愛媛県農会報』第72号（明治38年3月）

45) 温は『愛媛県農会報』第72号（明治38年3月）に「麦稈真田に就き」と題した原稿を執筆している。

46) 『愛媛県農会報』第73号。明治38年4月。

媛県農事大会に出席するために今治町に向かった。

3月23、24日の両日、今治町で第5回愛媛県農事大会が開催された。会場は今治高等小学校であり、県下各地から約600余名が参加した。温も24日に信用組合について所感を講話している⁴⁷⁾終わって、25日に船で帰松した。

3月27日からは浅海村に農事講習のために出張した。同村小学校にて温は4月1日まで肥料や土壌について講義し、後は山下技手と交代した。

4月も、温は各村に出張し、また講話を行った。8日には、作毛品評会賞品授与式に出席のため堀江村に温泉郡長とともに出張した。10日に浮穴村で懇親会があった。郡長と前技手の八木豊太郎が出席し、八木の辞任の原因となった同村の麦種子事件が円満に解決している。11日以降、温は頻繁に郡内各町村を巡回・講話した。11日川上村、12日南吉井村田窪、13日久米村、14日道後村、15日伊台村、16日潮見村、17日粟井村、18日北条町、19日三津町、20日余土村、21日味生村、23日荏原村、24、25日東中島村、28日道後、素鷲村、29日桑原村等々。巡回・講話は麦稈真田の奨励であったり、塩水選ノ奨励等であった。例えば、29日の桑原村「桑原村出張。各大字ヲ巡り、塩水撰施行ヲ督励セリ。同村ハ各家任意ニテ十分実行ノ見込ナシ」等。

4月30日、温は、余土村に出張した。そこで、鶴本房五郎県農会理事と会談し、県農会入りを決めた。この日の日誌に「本日鶴本ヨリ談合アリ。県農会へ転勤ノ約ヲナス。今朝郡長へ談ジテ略承諾ヲ得タリ」と記している。千石興太郎技師の転出（3月に辞任）に伴う後任であった。

なお、家族に関することであるが、4月2日に温の妹ケイ（明治18年1月23日生まれ。このとき20歳）が岡田朋義と結婚した。至急のことにて、充分準備が出来なかった旨、「日誌」で述べている。

5月も、温は各村に出張した。4日に余土、雄郡、垣生、生石村に出張し、粃の塩水選を指導した。6日には荏原、坂本村に出張。8日からは、垣生村で

47) 『愛媛県農会報』第73号。明治38年4月。

の農事講習会を行い、講義した。14日講習が終了し、授与式を行った。

5月15日、温は温泉郡農会を辞し、愛媛県農会技師に就任した。この時、温34才。『愛媛県農会報』第75号に就任の辞が述べられているが、大要次のごとくである。愛媛県農会創立以来、本会は銳意活動を行い、本県農業は面目一心、長足の進歩を遂げてきた。その進歩にあたり、本会技師風雲児たりし千石、衛藤両技師の敏腕、卓識大であった。今、両氏県農会を去り、四顧寂寞、時局難境に入っている。本県農業の進歩は誠に異数の事跡を示したが、しかし、まだ、農事改良の花を開き始めたに過ぎない、艷麗芳香、福利増殖の美果はいまだ遠き未来に属している。このことを顧みれば、農会の責任極めて大であり、不敏、不才、浅学の身で、果たしてこの責任を全う出来ようか。しかし、先輩諸氏の援助により、正直につとめ大事に働かん、浮世の事にうとき身なれば、と述べている⁴⁸⁾ 誠実な人柄がうかがわれる。

48) 『愛媛県農会報』第75号。明治38年6月。